



中浜慶和さん（Mr. Yoshikazu Nakahama）

- ・神戸出身
- ・1964年ダイキン工業株式会社入社、総務担当部長を経て現在同社シニアスキルスペシャリスト、NPO 法人国際協力アカデミー（AICAT）代表理事、防災推進委員会理事。
- ・著書に「震災自衛マニュアル（大村書店）」など。
- ・曾祖父はジョン・万次郎。

中浜さんは、1995年の阪神・淡路大地震を契機に市民防災の研究を始められ、官公庁、企業、団体、市民グループ主催行事などでの講演や各種メディアを通じての防災の大切さを訴えておられます。日本での活動のほか、今日までに25回以上トルコを訪れ、防災対策セミナーを始めとする様々なプロジェクトを精力的に展開し、両国間の友好関係に貢献されています。主なプロジェクトは以下の通りです。

1. 「こころのパン」プロジェクト

- ・1999年8月及び11月の2度にわたるマルマラ地震の被災者に、芸術を通して復興に向かう被災者と子どもたちに、希望と勇気を与えるプロジェクト。震源地コジャエリ及びイズミットを中心に、毎年アートレスキューとしての美術展示会や多彩なワークショップ、講演やシンポジウムを開催。

2. さくらプロジェクト

- ・2010年「トルコにおける日本年」よりトルコ各地に桜を植樹するプロジェクトを設立し、今日まで35箇所、2200本以上の桜を植樹。

3. 「友情の架け橋」プロジェクト

- ・2012年、トルコの緊急救助隊GEAと共同で、在京トルコ大使館とともに、東日本大震災で被災した子どもたちへトルコに関する特別授業を行う。

4. 日本における防災プラットフォーム新組織設立

- ・日本の先進的な防災製品や技術の海外展開のため新組織設立に携わり、トルコでの事業化促進並びに市民や企業に向けての防災啓発、研修活動。

今回は、「トルコで活躍する日本人 vol. 2」として、2014年3月8日にイズミルで開催された『災害と国際交流「エルトゥールル号」から「こころのパン」』の講演内容を掲載します。

こんにちは。

土曜のお休みにわざわざお時間を作ってこの講演会にお越しいただきまして、どうもありがとうございます。

ドクズエイルル（9月9日）大学のご関係者様、そしてJ I K A D協会の多大なご協力により今日、ここで皆様の前でお話ができることをとても光栄に思っております。自分自身の体験と活動についてお話させていただきたくこちらに伺いました。時間に制限がありますので、さっそく本題に入りたいと思います。本日お話をさせていただく話の舞台は、トルコ、日本、そしてアメリカです。120年前、そして、それよりも古い時代のお話です。

曾祖父、祖父、父、そして私。4世代に亘るこの4人に共通している点は、人生を変えるような大きな自然災害に遭遇していることです。この120年の間に起こった自然災害、そして過ぎ去った歳月がひとつになります。私が、自然災害から学んだことは、お手元のチラシにもあるように大規模災害は、大きな苦しみや悲しみをもたらしますが、その中から間違いなく新しい芽が芽吹き、世界中のあらゆる場所で、新しい希望、勇気、そして影響をもたらすということです。本日は説明することは、私がこれらのことから得た教訓です。

一人の人間として、災害を受け止め、災害のもたらす苦しみや悲しみを乗り越えた人々に共通の経験についてお話ししたいと思います。今まで私は、日本で地震についての研究をしてきました。ご覧いただいているように世界で発生した震度5以上の地震を見ていくと最も多くの地震が発生している国は、中国、インドネシア、イラン、そして日本です。6番目には、トルコが来ます。実際かなりの数の大地震が世界で発生しているのです。この図でそれがお分かりいただけると思います（スライド1）。日本では、地震に限らず毎年かなりの数の台風と呼ばれる自然災害が発生しています（スライド2）。今、ご覧いただいているのは、自然災害ではありません。人間が起こした災害、戦争です。これは、私が生まれた神戸市の第二次世界大戦中の光景です（スライド3）。私の父は、1945年に神戸がこのような状態である時に、私を含めた大家族をどうやって食べさせていくのか、また子供達をどうやって育てていくのかという大きな困難にぶつかりました。

トルコと日本の友好関係は、ある海難事故により始まりました。

皆さんもご存知だと思いますが、トルコには、この事故について書かれたたくさんの本があると聞いております。エルトゥールル号についてお話ししたいと思います。日本の方々は、この話についてあまり良く知らないと思いますので、仔細なことをお話するより本筋からお話させていただきたいと思います。

エルトゥールル号は1864年にトルコで造船されました（スライド4）。トルコは、1860年には、フリゲート艦を造船する力を持っていました。しかし、日本は、外海に出始めてまだ日が浅く、このような大きな船を造る技術は持ち合わせていませんでした。当時、日本は、船を英国と他の諸外国から買っていました。その当時、トルコは、先進国のひとつでありました。日本は、トルコからいろいろな事を学ぶなければならないような国でした。日本人として我々は、当時の状況を再認識する必要があると思います。

当時のトルコの国家元首は、アブドウルハミット2世、日本には明治天皇がいました（スライド5）。明治天皇への返礼として、1890年にエルトゥールル号は日本に行きました。エルトゥールル号は、日本にとっては国賓でした。ご覧いただいているように当時の新聞に記事が掲載されました（スライド6）。1890年9月18日に起こった遭難では、公式データによると69人が助かったことになっています。しかし、この大きな海難事故で命を失った人の正確な数は、分かっていません。575人か577人が死亡したことになっています。エルトゥールル号がイスタンブールから日本に到着するまでに1年かかり、その間、たくさんの港に立ち寄りました。正確な死亡者の数が判明していないのは、それも原因になっていると思われます。また、コレラの発生も原因のひとつだと思われます。立ち寄った港で船を下りた人達、反対に新たに乗船した人達がいました。はっきり分かっていることは、69人が助かったということだけです。この69人は、当時の日本の戦艦「比叡」と「金剛」でイスタンブールに送り返されました（スライド7）。トルコと日本の友好の歴史には、このエピソードもあります。

ここで私にも関係してくる重要なことをお話したいと思います。

さきほどご説明したエルトゥールル号の遭難事故は、かなり世間に知られていますが、昨年、私が日本の国会図書館で行った調査で、新たな事実が判明しました。実際、この事実には、とても驚きました。これは、1890年の7月19日の新聞記事です（スライド8）。エルトゥールル号でコレラが発生したことが書かれています。その頃、コレラが流行しておりエルトゥールル号も海上でその影響を受けたようです。この件は、1本の電報で日本政府に知らされました。右にあるのは、朝日新聞の記事です。この時期、日本でコレラが何度か流行しました。この流行は、1870年頃から始まり10万5千〜8千人がこの病気によって死亡しました。エルトゥールル号が日本を訪れた1890年には、4万6千人がコレラに罹り死亡しています（スライド9）。本調査では、これらの事実を確認しました。

当時の日本は、閉鎖的な社会からようやく脱皮しかけたところで、医療は十分に発達していませんでした。明治天皇のご努力にもかかわらず、一般社会では、広範な医療知識が普及していませんでした。ご覧の通り、コレラを野獣にたとえて、猿の絵でコレラを打ち負かすことができると信じられていました。右の絵は、1912年に発行された新聞を見ると、パリでコレラの流行があったとき、コレラを死の天使とみなされていたことが分かります（スライド10）。この例を見ても当時は、現代の医療水準から見れば、コレラについての知識が不十分であり、恐れられていたことが分かります。そして、1890年にエルトゥールル号もコレラに出会いました。私もこの新聞記事をくまなく読みました（スライド11）。そしてとても驚く事実遭遇しました。

その記事には、備考として「エルトゥールル号でコレラ蔓延。日本政府は、船を消毒する必要がある。同船で罹患した人々に治療を施すこと、コレラが外に広がるのを防ぐことが必要」とあります。消毒作業を誰が行うかについては、内務省の職員と医療技術者がその任務に就かされたとあります。この医療技術者として、中浜氏が任務に選ばれたという行を読んでとても驚きました。祖父が医師であったことは知っていましたが、このトルコの船でコレラ対策の作業に従事していたことは全く知りませんでした。このことは、昨年初めて知りました。

中浜医師は、エルトゥールル号で 3 回大きな消毒作業を行いました。この船が海水で洗われ何種類もの薬品で消毒されたことが新聞記事に載っています（スライド 1 2）。命があった乗組員を 3 つのグループに分けて陸上にあげ、必要な治療を施されるよう取り計らったそうです。700 人分の服、皿、そして飲食に使われた全てのものが消毒されたと書いてあります。本記事には、2 ヶ月にわたるこの消毒作業が 8 月に終了した時点でコレラの脅威が去ったと書かれています。

ここからトルコに帰国すると考えられていました。その時期のエルトゥールル号の艦長オスマン・パシャは、この消毒作業が、とても効果的で強力な方法であり、その全てが日本政府によって行われたことに感謝の念を表しています。この新聞記事に見られるようにエルトゥールル号は、トルコへの帰途についています（スライド 1 3）。帰途につき 3 日後、日本の太平洋海岸で台風のため遭難し 570 人以上の乗組員が死亡するという事故が起こりました。

さて、ここでちょっと過去に遡って日本と米国との関係が始まった頃を見てみましょう。太平洋へ漁に出たジョン万次郎という 15 歳の若者がいました。このジョン万次郎は、私の曾祖父です。ジョン万次郎は、さきほどお話しました中浜東一郎医師の父親です。ジョン万次郎は、14 歳のとき、漁師になりました。母親は、船に乗り実際に漁を覚えるようにと 4 人の大人の漁師が乗る漁船に息子を預けました。

1841 年 1 月 29 日、エルトゥールル号の遭難事故から数えて 50 年前に漁に出た漁船は、海で大風に遭遇します。8m の小さな漁船は、流れに乗って太平洋で漂流しました。この地図で見られるように（スライド 1 4）左から右へ向けて潮流に乗って下方に見える鳥島という島に流れ着きました。万次郎は日本に帰国してから、自分たちが海上でたどった道のりを地図上で示しています（スライド 1 5）。鳥島は小さな島です。左側には、万次郎が手描きした火山岩から成るこの島が見えます（スライド 1 6）。ここでは、「アホウドリ」と呼ばれる大きな鳥が生息しています。この鳥は人間になついているので簡単に捕獲できることから、この鳥を食べて飢えをしのぎました。しかし、アホウドリは渡り鳥であるため、島を去る時期が来ると一行は、飢えの危機にさらされました。

彼らが飢えに苦しんでいる時、ジョン・ホーランドという名前の捕鯨船が鳥島を通りかかりました。この捕鯨船は、彼らがまだ一度も見たことがないほど大きな船で鳥島での状況を知ってやって来たわけではありませんでした。この島には海亀がいて、捕鯨が長期間に渡ることから海亀を食料として捕獲するためやって来たのです。ホイットフィールド船長によって海亀の捕獲のため送り出された乗組員たちは、漂流し死を目前にした漁師たちを見つけました。

ホイットフィールド船長は、ジョン・ホーランド船でこの漁師たちをアメリカに連れて行きました。この航海は長期に渡りますが、その間、様々な興味深いことが起こります。当時は、アメリカ船は、漂流した船の乗組員を必ずハワイ島へ送り届けなければなりませんでした。捕鯨は、2 年間という長期間になるので、救助された漁師たちを 2 年間も船にしておくことが困難であると判断されアメリカの法律にのっとり、彼らはハワイ島に送

り届けられ、捕鯨が続行されました。

救助された漁師たちを連れて行くためにハワイから船団がやってきました。アメリカ船と太平洋で漁をする他の船との間の契約が履行されることに決まっているにもかかわらず、ホィットフィールド船長は、14歳のジョン万次郎と知り合い、彼に興味を持ち、アメリカに連れて行き教育を受けさせようと考えました。他の漁師たちは、彼らが万次郎の母親から漁師になるようにと預かった子供であるので、それはできないとこの意見に反対します。ホィットフィールド船長があまりに言い張るので、この件に関し万次郎自身の決定を尊重することになりました。

万次郎は、十分に英語が理解できないことからホィットフィールド船長の申し出を受けます。これは、私にとってもかなり興味深いことです。当時、彼の生まれ育った日本の四国という場所は、全てにおいて外の世界から隔離された場所でありました。十分な教育を受けていない漁師の若者が、全然知らない人たちと未知の国であるアメリカに行こうと決めたことは実に興味深いことであります。当時、アメリカのみならず他の外国に関しても情報がないまま大きな船に遭遇したのです。現代人としての知識があり、少なからず世界を知っている私ですが、それでも白人、黒人、様々な民族、様々な言葉を話す人々と一緒に、この旅に出ようと決めただろうかと考えてしまいます。しかしながら、日本と米国両国の関係にとって大きな貢献をすることになるこの若者は、この決心をし、ボストンの北にある捕鯨で有名なニューベッドフォードに行くことになります。そこでは、24時間灯りが消えずに灯されているという記述があります。

ジョン万次郎は、最初にホィットフィールド船長の船で副船長をしているバニー家に居候させてもらいます。この副船長の家は、2階建てで万次郎は、この窓から外の景色をながめていたんだと思います。これは、アルバーティナ・ホィットフィールド船長夫人です（[スライド17](#)）。この婦人は、万次郎のアメリカでの母親であり、彼を学校に行かせました。万次郎は、1840年代にオックスフォード・ポイント・スクールという名前の学校に入学しました。この写真は1890年に撮影されたものですが、万次郎が入学した当時とそれほど変わっていないはずです（[スライド18](#)）。この学校で小学校・中学校を就学し、厳格さで知られるバートレット・アカデミーという学校で航海術教育を受けます。その後、捕鯨を学びホィットフィールド船長と一緒に捕鯨に出ます。ここに捕鯨のルートが記載されています。

ここに示されているルートは、万次郎が日本に帰る時にたどったルートです（[スライド19](#)）。1849年のゴールドラッシュ騒ぎを聞き及んだ方もおられるでしょう。1849年は、アメリカの特にボストン市ニューベッドフォード地区に一攫千金を夢見て金の採掘に人々が集まった時期です。ジョン万次郎も金の採掘に参加した一人で、陸からサンフランシスコに行くのは危険だったので海から、パナマ運河がまだ開設される前だったので、南アメリカを回ってサンフランシスコに行き金鉱で働きながら帰国のためのお金を作り、ハワイのホノルルへ行きました。ホノルルで船を変え、日本の南にある沖縄に着きます。その時期、日本は鎖国中でしたが、日本人の中には、日本開国の必要があると考える人々もいました。ついにジョン・万次郎は、沖縄から日本へ帰り着きました。

その後、この若者のした経験は、様々な形で記録に残されました。当時、この話を題材にした本がベストセラーになっています。今から 150～170 年前に一人の個人の体験が何十冊も出版されたということは、歴史上大変興味深いことでもあります（スライド 20）。

万次郎は、当時の日本で最も英語のできる人物として知られていました。そして彼のまとめた「ベッドフォード・ポスター」という本は、現在博物館に収蔵されています、また彼が和訳した航海術専門書は現在でも重要な専門書として使われています。ご覧いただいている様に蒸気船の絵の様にアメリカで多く売られている絵も描いていました。「チムボ」つまり「スチームボート」と書いています（スライド 21）。耳で覚えた英語をそのまま言葉で表したのです。当時の日本人は、万次郎を通して英単語を日本語として覚えしました。例えばアメリカの国営放送で、アナウンサーが、日本の子供たちに「ホワット・タイム・イズ・イット・ナウ」と訊ねると子供たちは理解できません、万次郎は、これを日本語で意味のある言葉におきかえました。アナウンサーが再び訊ねたとき、子供たちは、「イツ・ナイン・オ・クロック」とちゃんと答えることができました。

ジョン万次郎が、150～170 年前に獲得した英語の能力は、現在でも効力を発揮しているように思われます。日本が通商を開始するかしないかという時期に最も重要な事件が起きました。1853 年 7 月にアメリカのペリー提督が 4 艦の船団を引き連れて日本にやってきました。ジョン万次郎は、最も英語を理解する日本人として政府の通訳に任命されました。日米修好通商条約という最初の通商条約の締結に向けての協議の際、通訳をしました。日本政府は、アメリカに「咸臨丸」という船で代表団を送り出します。エルトゥールル号がトルコと日本の間の友好関係の始まりだといわれていますが、実際は「咸臨丸」は、アメリカに行った際、トルコ大使館へも訪問しています。これが日本とトルコの最初の交渉とみなされています。これは私個人にとってもとても興味深い事柄です。

一行は、サンフランシスコで宿泊します。ジョン万次郎がこの船の船長、勝海舟に書いた手紙が残っています（スライド 22）。彼の手紙は、英語に訳され送られます。こうして英語の手紙から日本語へ最初の和訳が行われました。こちらはさきほどご説明した航海術の専門書です（スライド 23）。万次郎は、海軍で航海術を教えました。その後、日本の東京大学の前身である開成学校で教鞭に立ちます。ここで数多くの学生が、ジョン万次郎に英語と軍事学を教わりました。近代日本の重要な政治家や有識者は、ジョン万次郎から世界情勢を学んだことが分かります。現代日本史を研究する人なら誰でも聞いたことがあるであろうこれらの人々は、皆、万次郎から英語を学んだのです。

トルコと日本の関係の話に再び戻って、自分自身と当時の話について語りたいと思います。1999 年にトルコで大地震が起きました。阪神大震災は 5 年前の 1995 年に発生しました。ご存じのとおり、1999 年の大地震は 8 月に発生しましたが、11 月 12 日にもドゥズジェ地震が発生しました。ドゥズジェ地震が発生した日、私はイスタンブールにおり、災害対策に関する国際会議で講演しておりました。私はこの会議に招待されていました。会議で私の発表が終わった三時間後に、ドゥズジェ地震が発生しました。私はイスタンブールでこの地震の揺れを感じ、その後ニュースで知りました。

9000 キロメートル離れた場所からこの地震発生の瞬間に感じた事は、「恐らく私は、この国で講演するために来たのではない」という事です。つまり、この遠い国で地震について語っていた時に、地震を経験し、阪神大震災を思い起こしたという事です。私ができる事は、パン、水、薬、テントを持って行く、というような事ではありませんでした。阪神大震災を経験した一人として、その3~5年後に、震災で傷をおった人々を精神的に支援する事でした。テレビで目にした12、3歳の女の子を忘れることができません。目の前には白いシートでくるまれた、父親と思われる人が横たわっており、女の子は泣いていました。

トルコ語がわからない状況で、テレビで見たこの光景にとってもショックを受けて、この子供達を勇気付ける為に、なにかメッセージを送らなければと感じました。トルコでは若い世代が大部分を占めており、この子供達こそが、将来トルコの将来を担う子供達です。彼らを勇気づける必要があると感じました。しかし、私は彼らを知りませんし、彼らの言葉も知りません。どうしてよいのかもわかりませんでした。何も出来ない状況で、その子に、人々に、どのようなメッセージを送ることが出来るかを考えました。言葉を使わなくとも、メッセージを伝える方法が何であるかを考え、それは芸術であると気づきました。芸術により、人々はお互いを勇気付ける力があります。絵画と向き合って、人は心の中で対話する事ができます。このような問答を自分の中で行いました。私はそれが芸術であることを確信し、芸術が人間の体の栄養ではなく魂の栄養になると考え、「魂の栄養」という名の活動をここで始めました。

コジャエリ震災で、コジャエリ市長は「人間には水やパンが必要であるように、芸術もまた必要である」とお話しされ、この計画に多大な支援をいただきました。そこでは、様々な活動が行われました。52人の日本の芸術家が参加して、130以上の絵画や彫刻がコジャエリ市に寄付され、現在も市の博物館で展示されています（スライド24）。我々は、小さな活動から始めました。芸術の家で展示を始めましたが、この展示はイズミットだけにとどまりませんでした。震災後にアンカラ、イスタンブール、イズミルへ避難した被災者がいることを私たちは知っていました。これらの県でも展覧会を開く必要性を感じていました。彼らからも要請が来て、展覧会を開催しました（スライド25）。それらの作品は、現在コジャエリ大学にある博物館で展示されています（スライド26）。

この計画の一環として、子供達と写真のワークショップを開きました。このワークショップでは、様々な活動を実現させました。その一例として、自分の写真を撮影し、自分の願いを写真の上に書くという活動がありました（スライド27）。音楽イベントも行いました。沖縄の「三線」という名の楽器の演奏でダンスショーも行いました（スライド28）。全ての子供たちの顔を良く覚えています。絵画展も行いました。とても多くの関心が寄せられました。日本の芸術を説明する何百冊もの本を持ちこみ、関連地域の図書館に寄贈しました（スライド29）。デイルメンデレの海沿いで行われた木像シンポジウムには、日本の芸術家が参加し、授業を行いました（スライド30）。また、この52名の芸術家達の中には、個展の開催を希望する人もあり、そのような形でも私たちを支援して下さいました。コジャエリでは多くの個展が開かれました。二国間市民の相互交流を活性化させる為に、布市場で生産された作品を両国、そして自治体の協力の下、芸術家達の助けを借りて作成しました。芸術家達は、市民の似顔絵を描き、下にそれぞれの名前を日本語で入れました。

この活動は日本でも行われました。トルコ製の布を日本に持って行き、日本の参加者と共にパッチワークで大きなパネル画を製作しました。共同展覧会も開きました。日本で展示された作品をトルコに持ってきて、展示しました。このようなワークショップをいくつか行いました。音楽活動も行いました。その中のひとつは、私も会員である「タンスイ・コーラス」という名前の男声コーラス隊をコジャエリにある音楽学校のコーラス隊に紹介し、コンサートを行いました（スライド31）。トルコ語でトルコ国歌を歌うことができる唯一の日本人コーラス隊員は恐らく私達だけです。

様々なワークショップや、芸術家達の展覧会を開きました。こういった活動をより発展させていくために、日本とトルコの大学間で良好な関係を発展させる必要性を感じ、ただ大学に学びに行くのではなく、各大学が明確なテーマで活動するよう望みました。私たちの活動を通じて、コジャエリ大学と関西学院大学の間で交流協定が結ばれました。私たちの協会の当時の会長は関西学院大学の先生であり、二大学の交流は現在も続いています。

私は活動記録を作成すると同時に自身が災害対策専門家であるため、様々な地域でこの分野に関する技術的な研究活動成果を伝えてきました。大災害が発生した際には、私たちは互いに助け合いましょうと呼びかけ、そのために柔軟な国際援助ネットワークを構築したいとお話しています。今日この行事に参加していただいている皆様の中には学校教員、生徒、市民団体の職員、公務員、大学教授といった様々な立場の方々がおられます。すべての立場の人がそれぞれの職業、役職の持つ可能性を十二分に発揮させ、共に災害に対処できるのではないかと考えています。

例えば、あるタクシー運転手が「その場所を知っています。私の車で行きましょう。」と言えば、専門家をその災害が発生した場所に届けることができ、状況を把握する事ができます。また、他の人は、状況を確認して、日本に知らせる事ができます。他の国々や関係者に正確な知識を伝えて、働きかけを行い、的確な援助を確保することができます。このような形で、柔軟で確実な災害支援を実現する事ができるとお伝えしたいのです。

この活動の翌年、2010年にトルコにおける日本年が宣言され、私たちはその為に桜の苗木を寄付したいと考えました。毎年1000本を合計3年間寄付し続けたいと希望しました。ご覧の通り、イズミルで行った活動があります（スライド32・33）。イズミルの活動で使用したあの音楽がまだ耳に残っています。実のところ、イズミルで植えた桜の苗は、トルコのあらゆる場所に送られた桜の中で、最も健やかに成長して美しい花が咲く桜となりました。イズミルは日本の桜の苗が最も深く根付いた場所です。私たちは多くの都市に、そして都市だけではなく、35の様々な組織や協会に桜の苗木を寄付しました（スライド34）。もちろん美しく育ったものもあれば、育たなかった苗木もありました。しかしその後、約二週間で一回開花する四品種を寄付しました。そしてそのような桜の見学ツアーでさえ実施できると考え、実現させました。

この活動の後、日本へ帰国した直後に、日本で2011年の震災が発生しました。ここにご覧頂いている松島は、震災により甚大な被害を受けた都市の一つです（スライド35）。ご覧いただいている出来事は、皆さんご存じの通りです（スライド36）。この大きな困難の中で、再びトルコの方々が援助して下さいました。こちらは、トルコの方々によって行わ

れた「愛の架け橋」という名前の活動です（スライド37）。トルコの子供達が、非常に多くの絵とハガキのメッセージ、手紙を送ってくれました（スライド38）。この子供達が書いたトルコ語の文章をイズミルにいる友人達をはじめとして、トルコに住む日本の方々や日本語を解するトルコの方々が翻訳して大きな活動の輪が広がりました。これらの絵は被災した東北の人々にとって大きな支えとなりました（スライド39）。とても深い気持ちが込められたこの絵は見る人に感動を与えました。現在この絵を前にしておられる皆さんも、同じ様に感じませんか？

本当にこの絵は、愛の架け橋となりました。本当にこの絵は、特に被災者の方々によって、とても愛され好まれた作品となりました。それらのメッセージには、とても貴重な言葉と表現が含まれています（スライド40）。そして、そのすべてにボランティアの方々の日本語訳が付け加えられていました。これ程までの絵がなぜできたのか、なぜこれらは作成されたのか、この活動を行っている他のグループの友人に尋ねました。彼らはこのように回答しました。「トルコの震災前、1995年に阪神大震災が発生しました。阪神大震災を経験した子供達は、1999年にトルコの子供達に多くのメッセージや絵を送りました。そのメッセージと絵に、応えたかったのです。彼らがしてくれた事に私たちはお返しがしたかったのです」と言いました。つまり、トルコの1999年の震災被災地域にある100以上の小学校と中学校の生徒達が、経験した震災に耐えながら、今回日本の東北の被災地の子供達にこれらを送ったのです。2万1500のメッセージと1000を超える絵が送り届けられました。私は日本の被災地の中学校に、この計画を紹介しながら、これらの活動がうまくいくように努力しました。

トルコと日本の間には真の友好関係があり、この友好関係によってトルコ人達が私たちに勇気を与えてくれます。「世界のあらゆる場所から、とてもたくさんの支援がありました。トルコの援助隊は世界で最初に被災地に来てくださり、他のすべての国が帰国した後も残り、最後に帰ったのが彼らでした。」と私たちは説明しました。そのため、中学校の生徒達は感謝の気持ちを込めて、このような一つの織物、タペストリーを製作しました。私はこの作品を日本のトルコ大使館にお渡ししました。トルコ大使館は、館内のサロンにこれを展示しました（スライド41）。本当に多くの方々が、この活動に参加しました。私はその作品を、トルコにも持って行きたいと熱望しています。災害は大きな苦しみや悲しみを生み出します。今日私がお話ししたことから感じていただけたと思いますが、災害は、新たな感情や新たな影響を生み出すきっかけにもなっています。新たなコミュニケーションと新たな友情が生まれていきます。すべての人々任務があります。皆さんも、私たちの子供たち、皆さんの子供たち、あるいは私たちの誰かが、その人生で大きな災害に必ず遭遇すると認識しましょう。大事なことは、どのような気持ちでこの災害を乗り越えるか、どのような心構えで災害に遭遇するかである、と私は考えます。

貴重なお時間をいただき、心から感謝致します。



講演会の様子

講演会後の集合写真

<総領事館より>

中浜さんは、ジョン万次郎を曾祖父にもち、また祖父の一人、中浜東一郎氏は、1890 年、横須賀停泊中のエルトゥールル号でトルコ人乗員の間でコレラが蔓延した際の処置に尽力した医師であり、もう一人の祖父中浜慶三郎氏は明治海軍主計を務めるなど、トルコとは並々ならぬ御縁がある方です。

今回は、2014 年 3 月に、総領事館及び日本イズミル文化友好協会（JIKAD）共催によってイズミルで初めて開催した日本文化週間「イズミルに吹く日本の桜風」行事の一環として実施した中浜さんの講演会の内容を皆様にお伝えさせていただきました。次回は是非、イスタンブールでも講演会を開催できればと考えております。

中浜さんが中心となって展開している、「さくらプロジェクト」により植樹された桜の木は、毎年春にはトルコ全国で、花を咲かせ始めました。まだまだ小さい桜の木たちですが、トルコの日本の友情の証として、時を経るごとに大きく育ち、その美しい姿をみせてくれることでしょう。